

「江の島紀行(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

江ノ電の「腰越駅」から、江の島へ続く砂浜までは、徒歩でわずか5分ほどだ。江ノ島駅よりも腰越駅からのほうが海に近い。



海に出るとすぐに小さな港が見える。「腰越漁港」である。江の島といえば、現在はマリンスポーツや江の島神社の参拝で賑わうが、もともとは海産物が有名だった。カツオ、伊勢エビ(鎌倉エビ)、ワカメなどだ。特に腰越漁港の「シラス」は有名で、周辺には「シラス丼」を楽しめる食堂も多い。



腰越漁港から江の島にかけては、弓型の美しい砂浜が続く。この浜は腰越に近い部分を「腰越海岸」、江の島に近い部分を「片瀬東浜」と呼ぶ。夏には「海の家」が立ち並び、東京から気軽に行ける海水浴場として賑わうが、今は遊ぶ人もまばらだった。



「江の島」は名の通り、本来は「島」である。しかし「弁天橋」(人道橋)と「江の島大橋」(自動車専用橋)で片瀬側とつながっているため、島だという感覚が薄れている。正確には、時期や潮の干満で陸側から伸びた砂嘴(さし)によって片瀬浜(湘南海岸)とつながることがある「陸繋島」(りくけいとう)である。過去には常時片瀬浜と陸続きになっていた時期もあったが、現在は満潮時には砂嘴はほぼ冠水し、文字通り「島」となる時間帯がある。



(国土地理院提供)

図は、満潮時に江の島の砂嘴が完全に冠水した時の航空写真である。Aが片瀬川河口で、主にここから流れ込む砂礫と沿岸流によって、砂嘴が形成された。Bが片瀬東浜、Cが片瀬西浜、Dの2本の橋が弁天橋(左)と江の島大橋(右)である。橋がなければ完全に島に見えるはずだ。